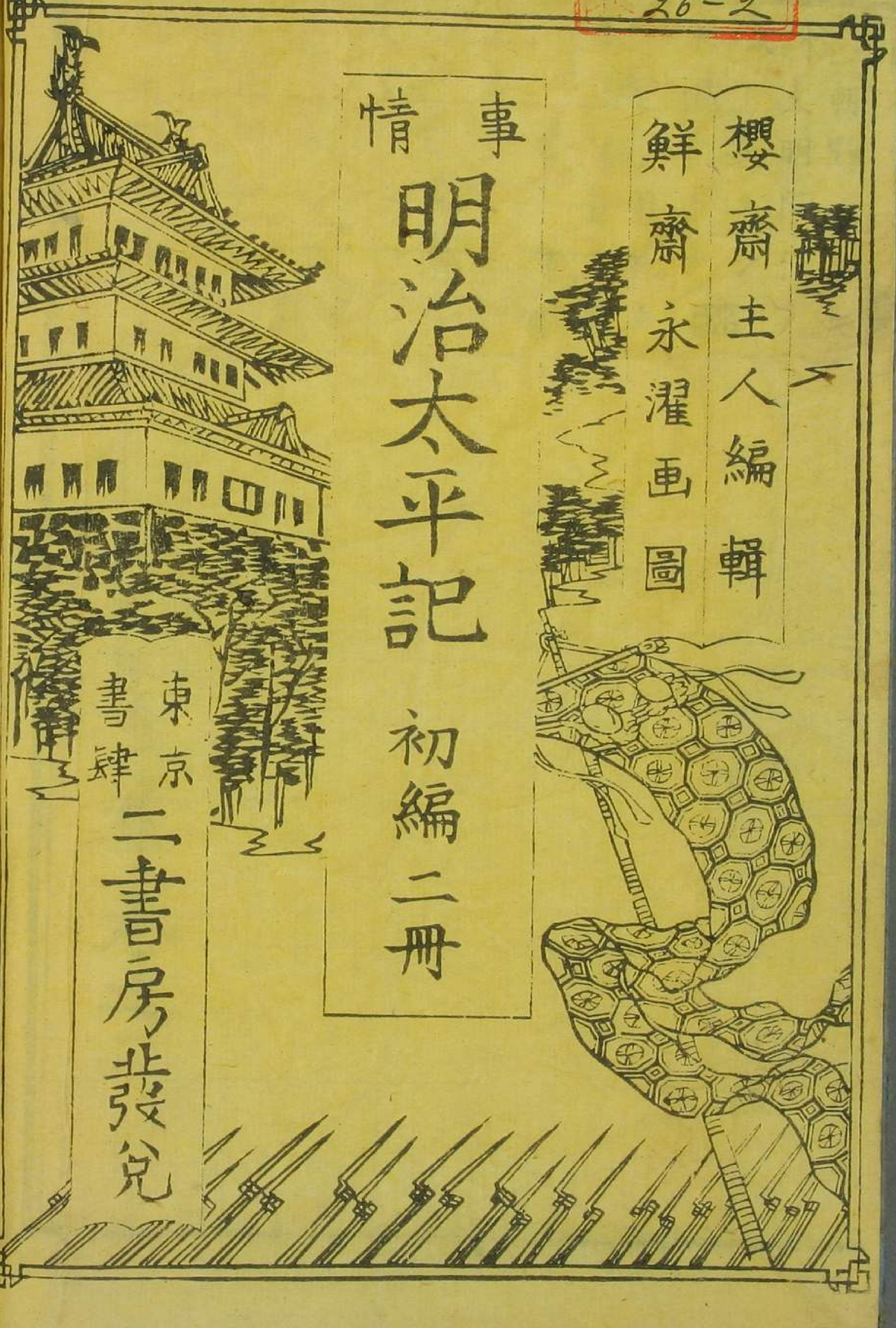
事情明治太平記

初編　下

へ遠14
2504
26-2

へ遠14
2504
26-2



櫻齋主人編輯
鮮齋永濯画圖

事情明治太平記

初編二冊

東京書肆
二書房發兌

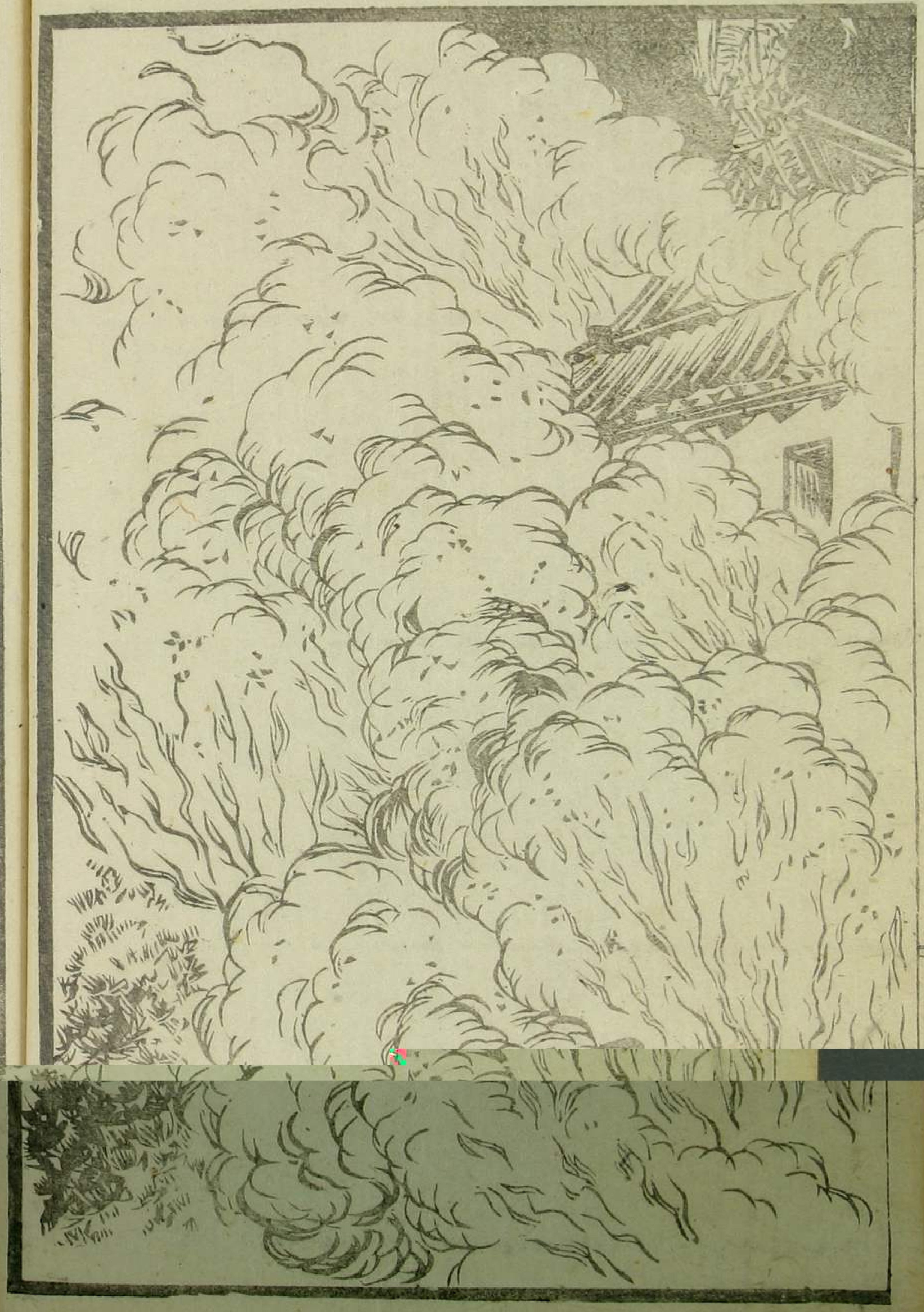
明治太平記初編巻之二

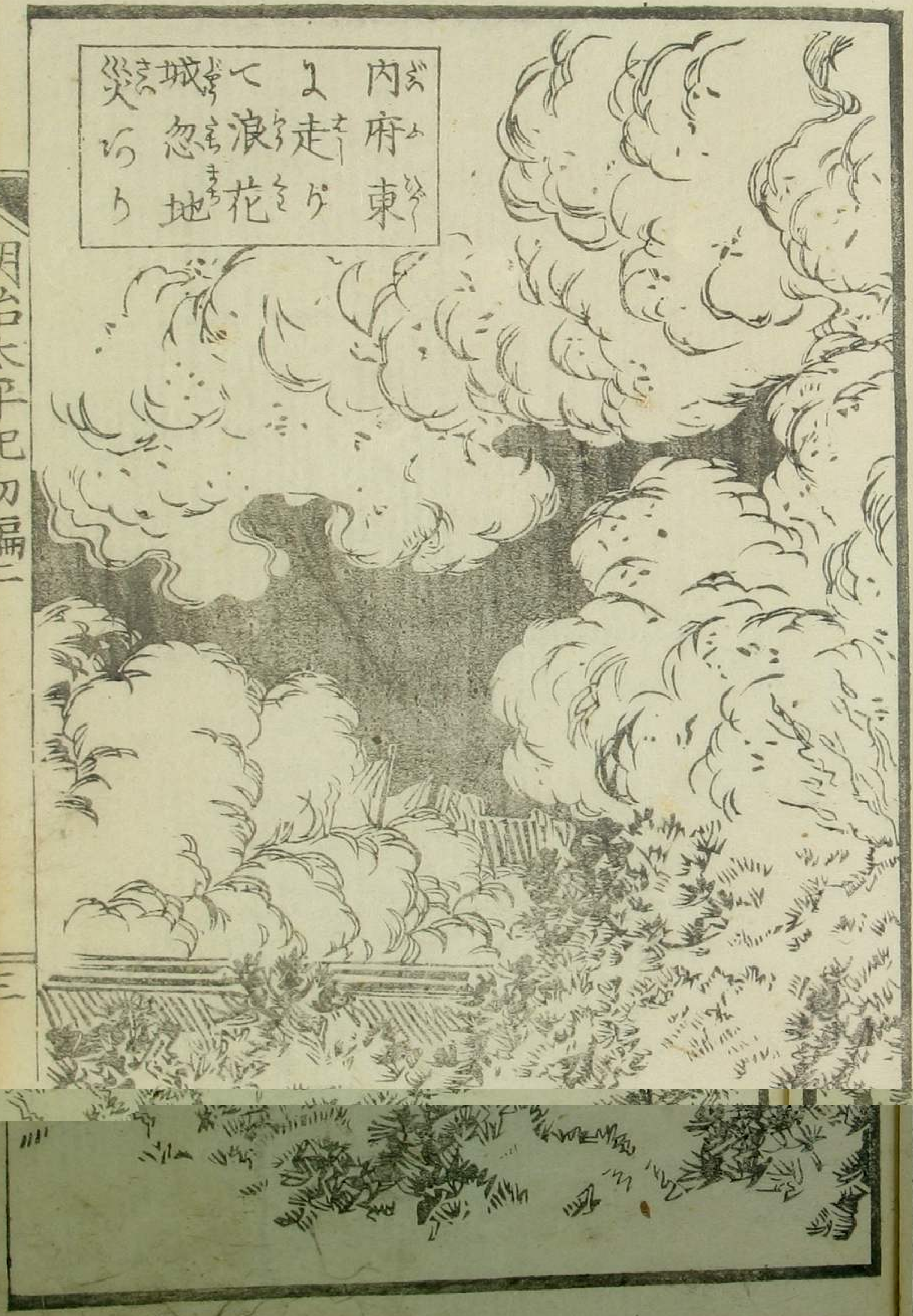
東京　櫻齋主人編

介程に徳川内府ハ大坂の城に在りて日毎に先隊の敗をろ後听き色を失ひ驚歎せしが深き所存や在しけん會津桑名の両藩主且つ板倉伊賀守小笠原壹岐守等と倶に回陽丸と号したる軍艦にうち乗て水路を関東に走るにぞ取残されし賊兵等ハ其首領を失ひしかバ何れも大いに狼狽して或ハ紀州或ハ伊賀と心こゝに敗

散して辛く東に皈りしとぞ仍て官軍大坂に至り忽ち城に火を放ちて其残黨を索ねらる斯て九日仁和寺の宮にも進んで浪花に赴かせしに賊徒等既に退散せしかバ事たちどころに平定せり然バ這回の戦争に薩州の将卒百五十人長州の藩兵百二十人討死に及びたり這ハ両藩の僅かの兵もて関東の大軍にむかひ屢々接戦に及びしゆへ死傷の者も多かりしかども斯く速かに軍功を奏したるゆへにより

爰に於て両藩の武威ます〱顕はれたりと言ふ然ば官軍一挙にして此大敵を敗走させしかバ尋で近国を定めんと高松その他徳川家に恩顧の諸藩に兵をさし向けその嚮背を問たまふに藩々種々の議論、ありしも遂に朝命に帰順せり是より先紀州藩彦根大垣の藩々もみな官軍に属せしかバ近畿関西の諸侯に於て何れも王室に逆くものなく年を更に正月十二日徳川内府以下賊将の官爵を削りつ同日四方に令して曰く去年





内府東より走りて浪花城忽地災なり

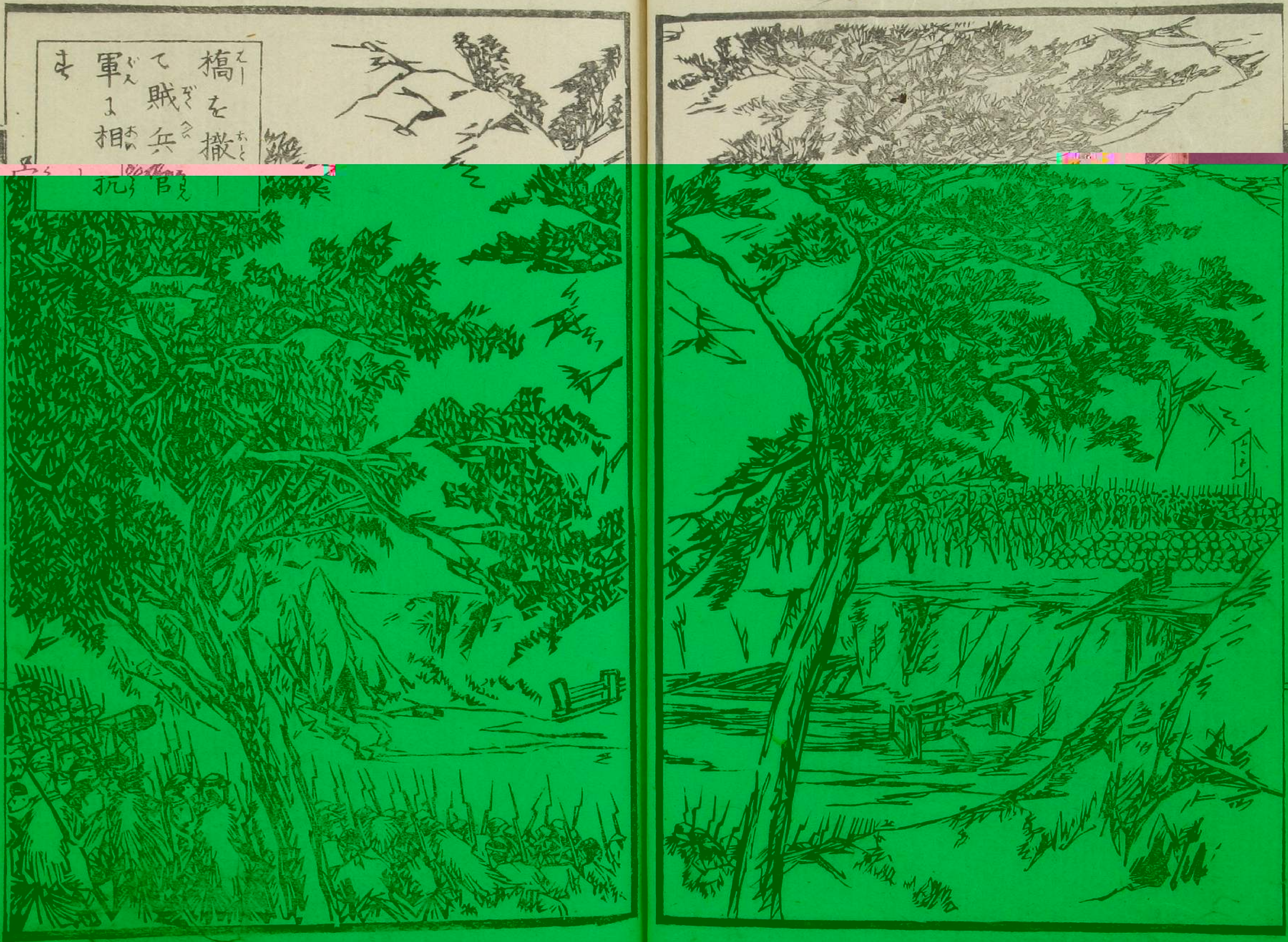
徳川
慶喜事に託し大
しく
県を諭し京に召
却
く大軍を率ひ殊に
を先
鋒となし入京する
遥
んとする是その心
則ち
朝廷を要するあ
あ
防ぎ互ひに戦
兵を
出しく連日錦旗

至り
終に東に走れるの
於
遁るべしのりば因て
して
親王有栖川宮を征
授け
あひ普く諸藩の兵
行幸
し海軍の煉兵を
に
ひて出兵の日を
官軍
道を分ちて江戸を
備前
佐土原亀山水口

海道より進み薩長の別軍及び因州土州大垣の兵は東山道より向ふといふ手配り既に調ひたるよし速くも江戸に聞ゆるゆゑ徳川の臣属譜第の諸藩士各大いに憤激して日夜江戸城に集會なし或ひは兵を函嶺に出し険に據りて防がんとも言ひ又は海軍の兵をもて大坂を撃んなど種々の計策を設けて頻りに徳川氏に逼るゆゑ慶喜はさらに寝食をなすべき虚間なきまでに将士の為に促さるれど

も既に先非を深く悔いて只恭順を主と做されば衆論耳に絶ねどもこれを斥けて更に用ひず唯り勝安房大久保一翁等を別室に召びて密旨を托し即ち自ら書を作りてあまね臣属に示して曰く必ず官軍に抗すべからず倘抗するに至らば猶予をもて我が心を則ち刺すが如かんとて遂に其侭城を出て上野寛永寺に屏居せり激徒等望みを失ひてその恭順を悦ばずなど諫めて用ひざる

無きなり然ど人々図る所あらんと私に兵を擔らひあつめて種々の隊名を唱へて三兵隊と侶倶に或ひは常州野州に脱し又甲州に走るもありけるが此ときに山道に向ひたる因州土州等の官軍ハ既に信州を平定して稍甲州に進ミしに甲府城に在る処の徳川旗下の面々は江戸より脱走の輩と共に力を戮せて勝沼驛に柵を設け嶮岨によりて防戦せり土州の兵士等関を排して敵の背を襲ひ来れバ賊兵街道の橋を撤し土俵を以て砲臺を築きまもるに抗ひて戦へど官軍もまた奮激して互ひの砲戦数合に及べど姑く勝負も分かざりしに此時因州土州の別軍左右の山に分け登り賊軍の横合より無二無三に撃立しかバ何かハ以て堪るべき頓て民家に火を放ちなほも防げど遂に及ばず賊兵大半爰に討れ其餘ハ四方へ敗散せしかバ官軍甲府の城を乗り取り此地の平定せしにより



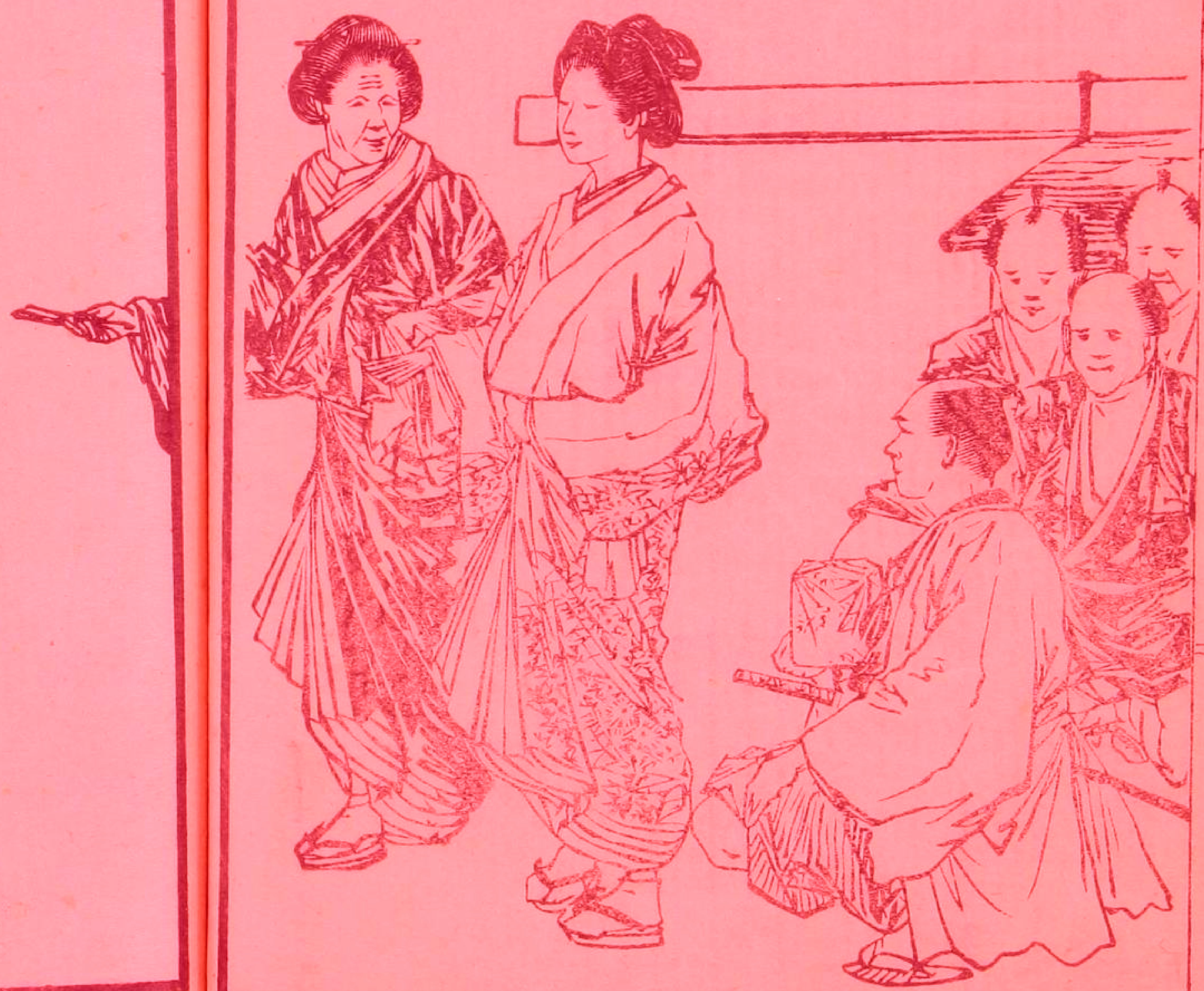
槗を撤て賊兵官軍に相抗す

真田家に托しつ因土の将士等總くへて江戸に向ひて進発せり時に三月六日とゝに倩同月の九日にいたりしかど山道に向ひたる薩長及び大垣の兵士等武州羽丹生に着陣せし簗田に屯集せしところの徳川家の脱走兵と大いに戦争に及びしに賊兵死力を尽せしといへども基是烏合の兵なる故謀るところ齟齬する事多く終に官兵に追立られて命を殞すもの尠からず其餘ハ野州に敗散せしかバ官軍進んで忍城に逼まり這ハ其をしめ脱兵等が忍に至

りて叓を議せしに忍藩私かにまを援けて応ぜるそのなれどあり因て藩の隊長其自殺して以て罪を謝すかぞ一藩官軍に属する事に至りぬ爰に於て山道の督将岩倉公子終に諸軍を引纏ひて板橋驛に着せらるゝもの時に當りて総督有栖川の宮にハ海道の諸軍を率ひ駿府の城に到着ありと然し江戸に聞ゆるなど既にして徳川慶喜ハ上野寛永寺の一室にありて恭順の外他事もなく深く慎みて居られしを輪王寺の宮憫ミて執當覚王

院等と倶に駿府城まで赴かれ頻りに哀憐を請られバ和宮及び天璋院より女使を駿府に遣はされしこと數ゝなる処なり此時海道の先鋒ハ既に品川驛に進めバ勝房州より其駅にいたり官軍の参謀たる西郷隆盛に相見へて具さに慶喜恭順の意を陳べ以て官軍の攻撃を止めんことを請ひけるが房州固より西郷氏とハ兼て相識る中なるゆゑ是より屢かの駅に往来做し只管事實を辨解してやまく之を請へるゆゑ西郷謝罪の実効を糺し事の形状を箇様々々と総督の宮に啟まうすにより総督の宮衆と議して事を諸軍に傳へつて遂に江戸を撃つことを止め諸道の官軍江戸に入りておの〳〵所々に屯ろせり斯て四月四日にハ勅使江戸城に入るに至れバ徳川の臣属盛服を着し道路を拂ふて是を迎へまゐるうち田安中納言勅使の前に進み出れバその勅宣のおもむきに曰く城及び軍艦銃砲盡く献ずべく慶喜の逆を助けし者死一等

を宥し罪[illegible]を
定めらく奏[illegible]ま
べく且慶[illegible]居の
死一等を[illegible]
宥し水戸[illegible]
に屏居[illegible]
せしめん[illegible]
とあり田安[illegible]



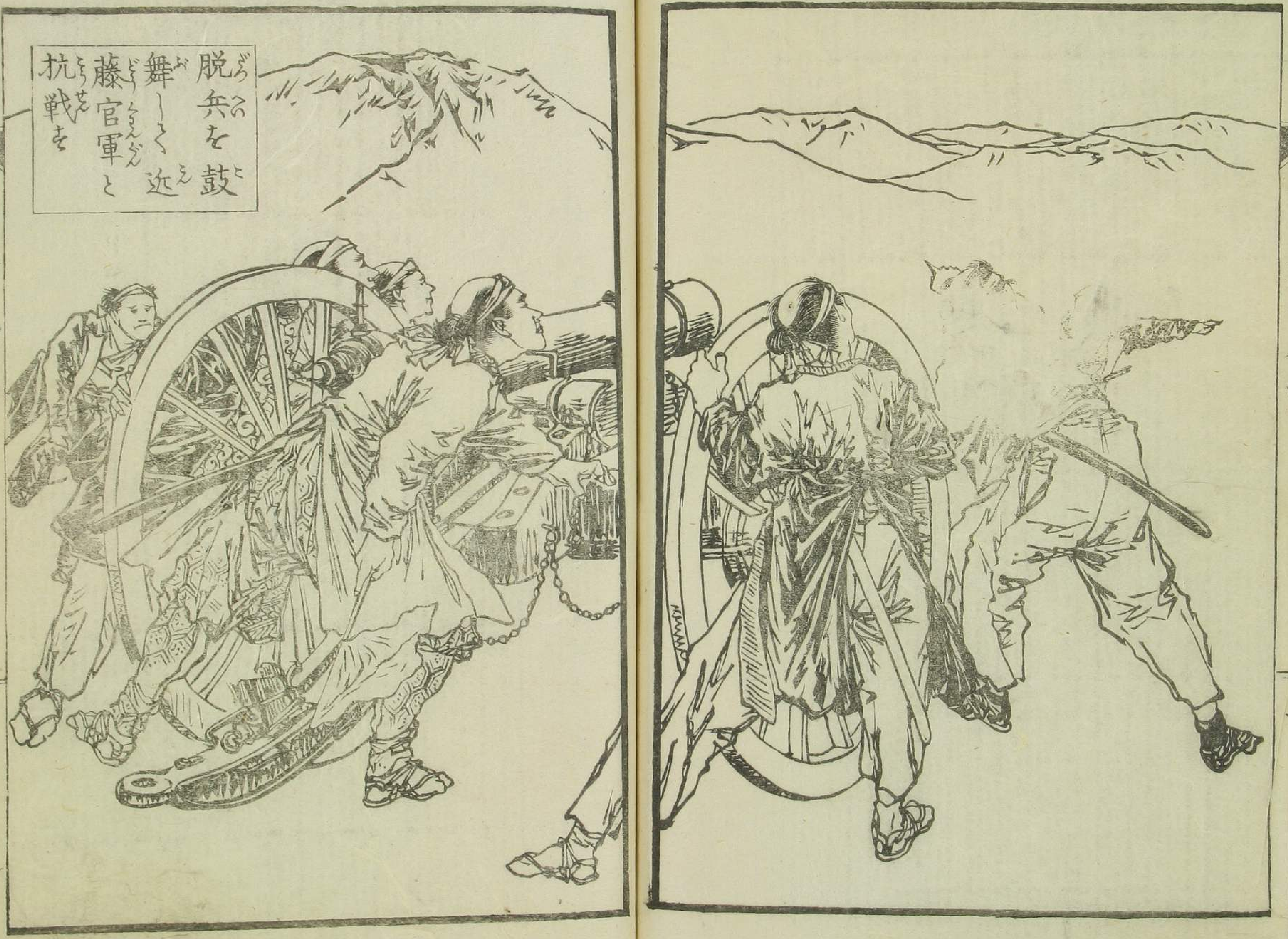
和宮天璋院より駿府城へ女使を遣はさる

家則ち命[illegible]を
奉ず因て[illegible]
徳川慶喜[illegible]ろ
是より僅[illegible]三日を
歴て水戸[illegible]退ぞされ
たりしが[illegible]徒等いよ〳〵憤りに
堪ざおの激[illegible]兵器を携へてここを東北に脱走せり
是より先会[illegible]津家よへ本国に退けば板倉小笠原の両

侯等も又東北に匿れたり斯る形勢なるが故に譜第の諸侯の江戸に在る者或は京師に上るもあり或は領地に退くもありさしも繁花の府下なりしも最物寂しくなりける然バ會津の藩士等は脱走兵と侶倶に兩総二野の間にありて其邊の諸侯を困より豪富の農商を説諭して或は同盟ならしめんとし又は金穀を募るなど既に結城の領主たる水野日向守これに応じて脱兵の徒を城に入れしに藩臣小幡兵馬以下六十人の者大義を唱へ其嗣子某なる者を奉じて主将とし藩主日向守及ひ脱兵を逐出して勤王の志氣を顕はせしに幾程もなく日向守脱兵と共に城に逼りて小幡以下の義徒を殺し忽ち城を取りしかど嗣子某は辛くも逃れて身旅官軍に投じたり因て賊兵甚だ鋭く此とき彦根諸藩の官兵宇都宮の城にあり賊軍勢ひに乗じて稍宇都宮を取らんとす折から官軍不勢なるゆへ

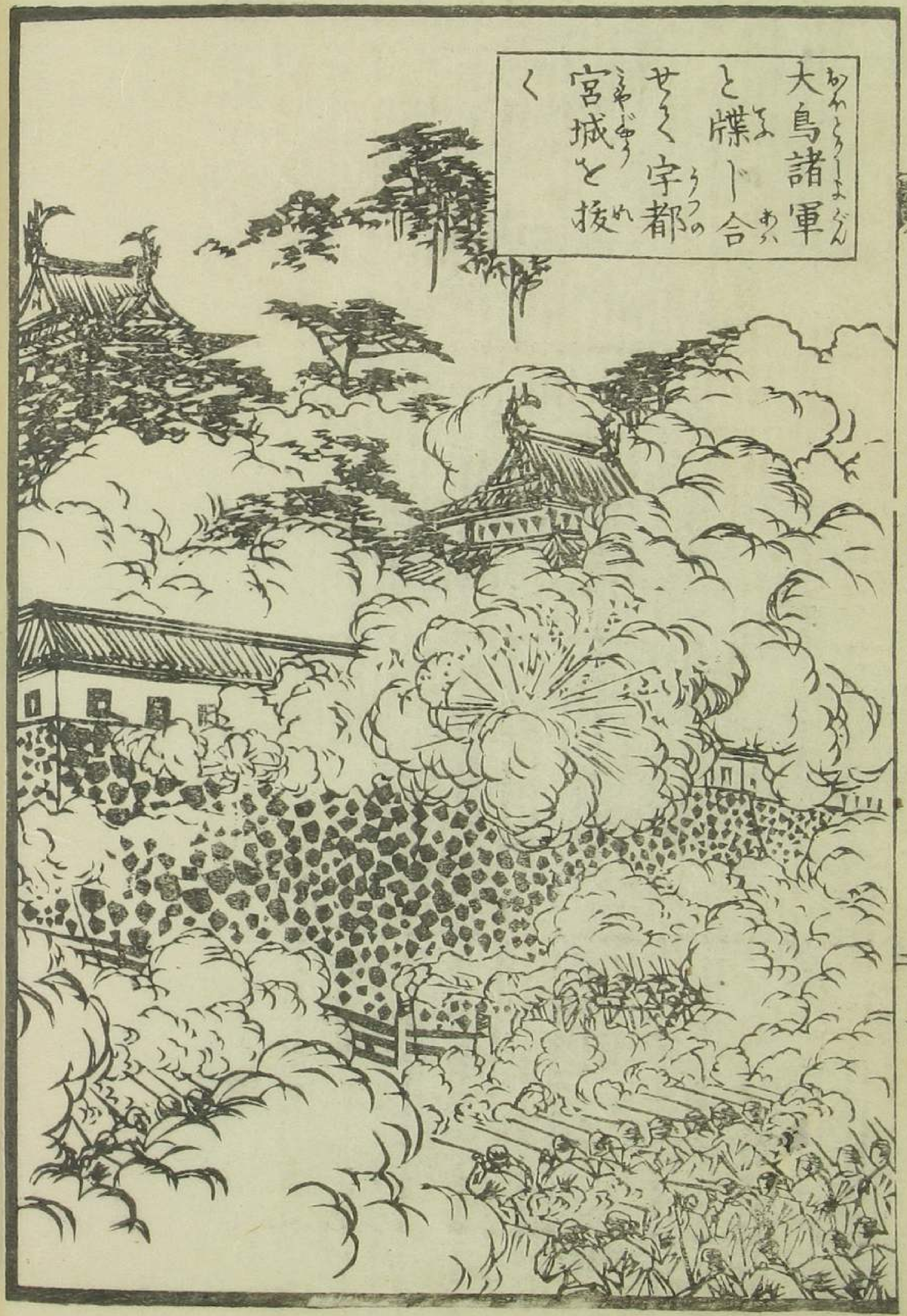
急を板橋の陣営に報げ頻りに援兵をもとむるゆゑ此地の参謀香川敬蔵及び薩藩有馬其長藩祖式某土藩上田某等兵三百を引卒して千住駅まで抵りしに賊の別軍流山によりて此隊の賊将近藤勇許多の脱兵を指揮して其近郷を横行するよし注進听へたりしが是まで捨おかざりければ香川等直ちに千住より流山へと兵を向け其備なきを襲ひしに賊兵拒ぐ支を得ずして散々に討なされ遉の勇も勢ひ窮まり

終に擒となりても板橋駅へ送られたり近藤勇といへるは驍勇の聞へ最も高く既に旧冬徳川氏の大坂に退く時も諸軍を率ひて伏見に殿し遂に其侭伏見駅に止まりて官兵の往来を支へ師起るに及びければ諸兵を指揮して働きしが弾丸のために股を傷既に伏見の戦ひ敗れて東軍散乱なせしに至り共に走りて江戸に来り徳川旗下の面々を煽動なして甲府に赴き地方の兵士と謀を合せ勝沼駅に屯して大いに官軍と抗戦

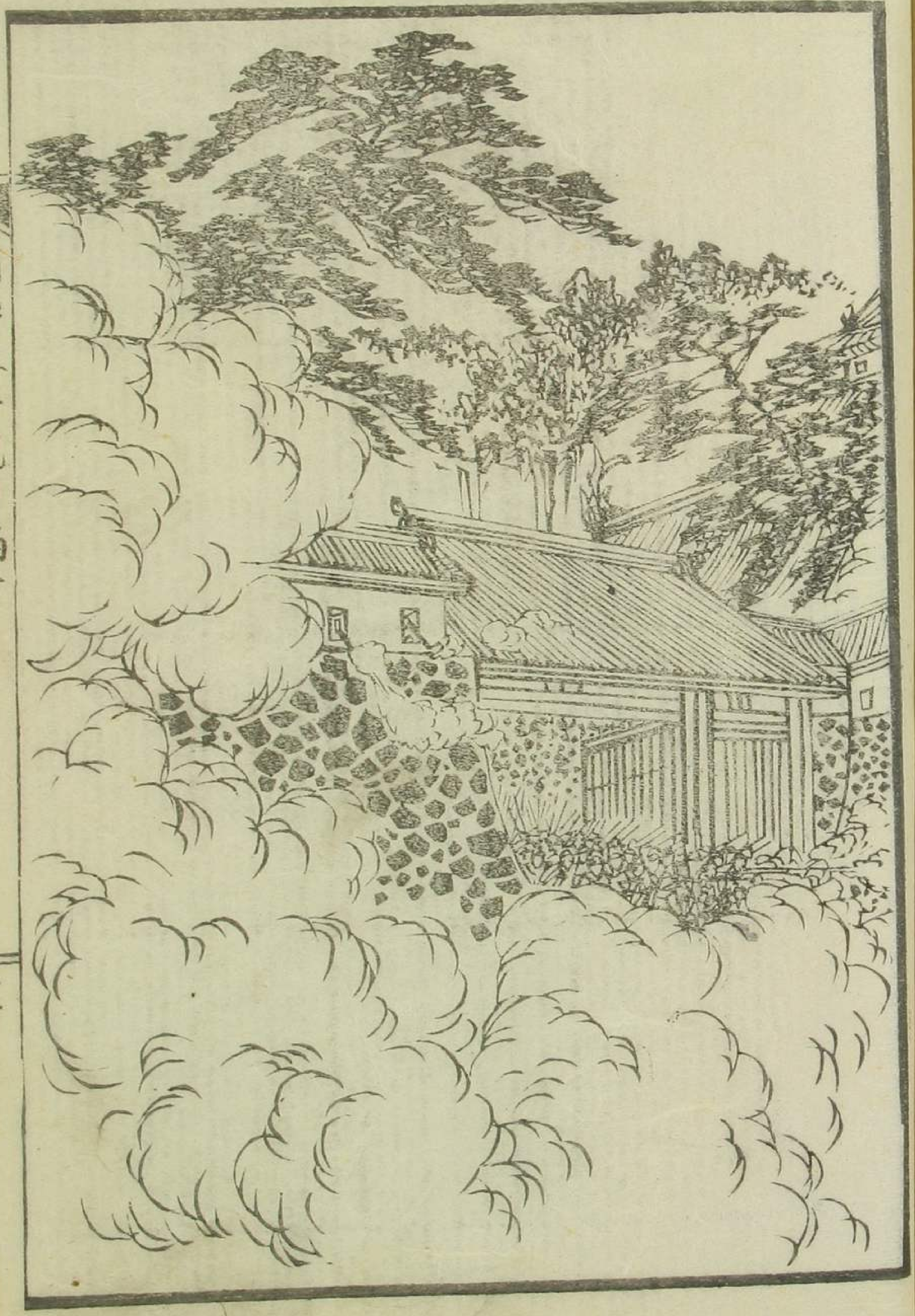


脱兵を鼓舞して近藤官軍と抗戦を

せしが因士の兵に敗られて部下の兵士と諸共に江戸近傍に走りて又流山に屯集して事を挙んと為せしに官兵卒かに襲ひしゆへ㕝成らずして捕へられ終に首を刎られ四條磧に梟せらる這ハ此近藤といへる人近年京師に久しくありて會津の謀議に與かれバなり斯て流山の賊徒平らぎしかバ香川祖式等の面々ハ其勢ひに乗じて結城の城に攻よれバ日向守且つ脱兵等ハこれを支ゆる㕝かなハず城を棄て走るにぞ官軍忽ちこれを乗取り祖式ハ須坂の藩兵を率ひて城に據りて茲に備へ香川ハ諸隊長等と倶に餘れる兵を引卒して宇都宮へと進発す爰に徳川旗下の士にて大鳥圭介と喚ばるゝハ謀慮勝れし人なるゆへ脱士等押て首将となし総野二州の間にありて已にして官軍の為に結城を陥いれられしを大鳥また取返さんと諸軍を指揮して襲ひ撃つ城兵抗ひ戦ふといへども大鳥の軍配尋常ならざれバ遂に防禦の術計尽て



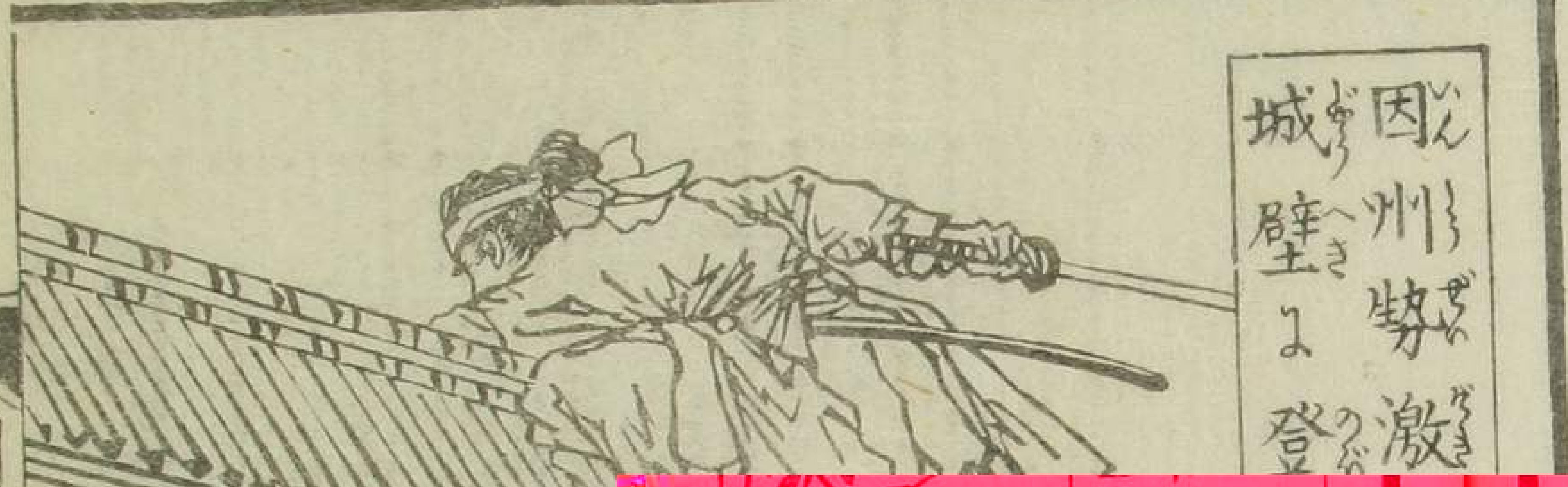
大鳥諸軍と牒じ合せて宇都宮城を抜く



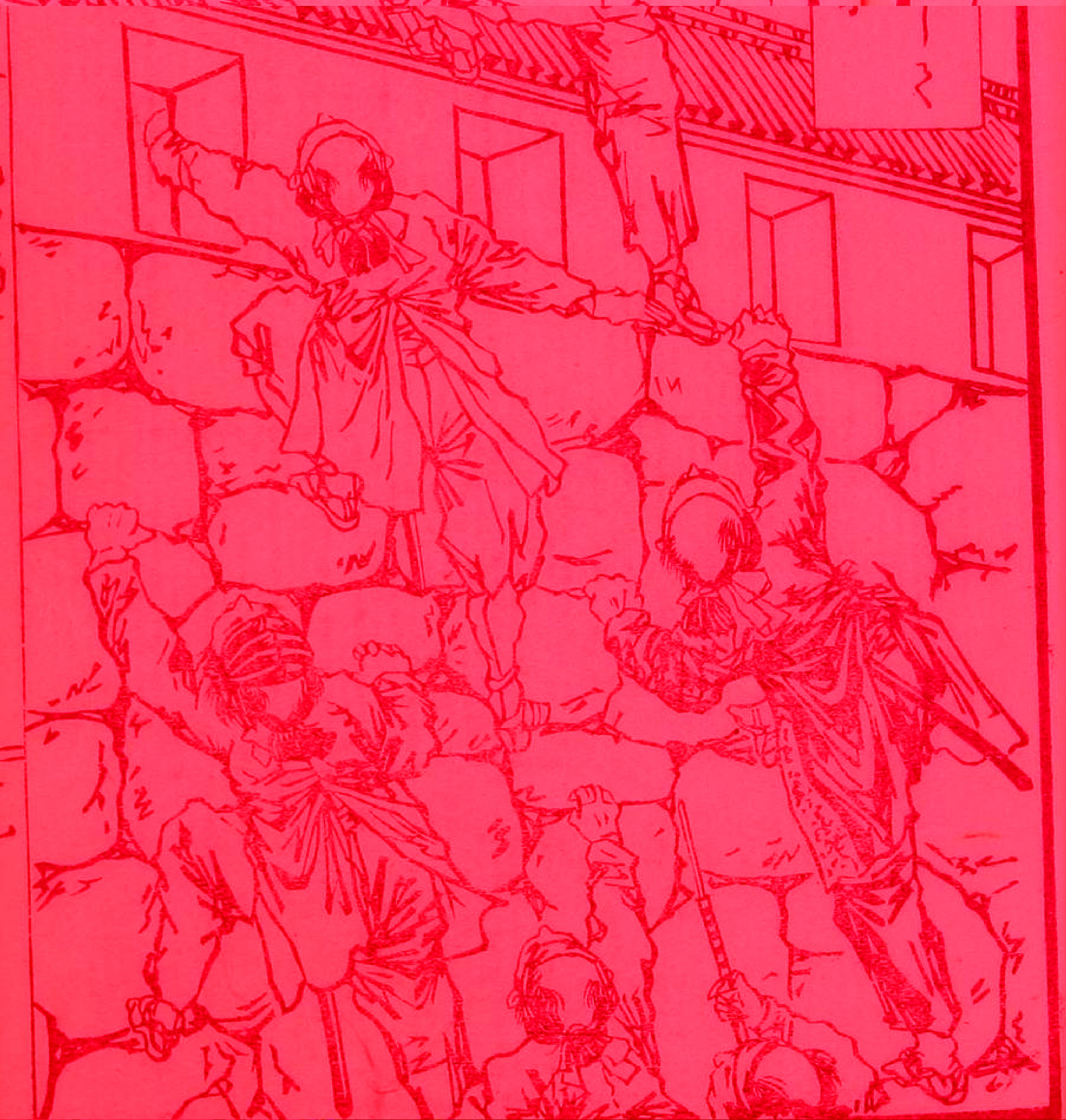
急報あり朝廷則ち薩長大垣因州土州の藩兵に命じて速が応援を做さしむるにぞ件の五藩ハ命を奉じて直ちに下野の壬生に至り茲にて諸藩の兵と合せ廿二日の早天に大挙して宇都宮を攻む此とき諸方に散乱せし脱走の兵士等が追々此地に集まり益勢ひを得たりしかバ大鳥頻て諸兵を部署し城を距ること一里ばかり地名を安塚といふ所に出て官軍を邀へ撃ち砲戦數合に及べる折から一手の賊兵間道より回りて敵の

先隊に進ミたる薩州大垣の兵士等が後ろより襲ふて砲撃なせし弾丸雨の如くなれバ遉がの両藩支へかねて殆んど敗れんと為たるとき薩長大垣の別軍の勢雀の宮駅より馳来りて先隊の兵を援けしかバ官兵の勢ひ再び震ひて頻りに賊兵を攻め討つにぞ賊兵終に兵を引て半ハ宇都宮の城に入り其餘ハ明神八幡の両山に據りて砲発なせど官軍ハその四方を圍みて爰を先途と戦ふる迭ひの砲声山谷に震ひ轟き

筒の烟りハ
角まるうち
備へ堅くきう
攻むるぞうか
いよ忿りく
官軍とし
喪ふ支最も
よ賊を殲



天を掩ひて殆んど人色を辨ぜざるなりし
日も西よ稍傾くよ及べども賊兵防禦
く官軍を撃つ程よ寄手ハ死傷の者多
死へたるなぞ因州の隊長河田佐久間ハ大
叫るやう我輩朝命を被りたる堂々た
區々たる流賊よ支へらまし衆く兵士ぬ
も遺憾此うへなし日いまだ没せざるうち
しく城を取らんず我よ續けと励ましる



此一言を氣を得たりけん因州勢ハ死を決しく弾丸の中を事ともせず矢庭に城に登りけれや一隅を乗り取りたり是に於て諸手の官軍何れも大いに奮発して猶烈しく攻たりしかバ遂ゞの大鳥防ぎかなく城及び両山ともに一時に乱れ立る程に官軍いよく勢ひを得てかの図を抜りて責潰せと四面斉しく手いたく蒐れバ今ハ賊徒等決心ありけん一手にありて突て出しが辛く血路を砍開き脱しく

日光に走りしかバ官軍躡く宇都宮の一城破かん取返しぬ恁ありし後も大鳥ら日光近傍に屯集し屢所々に兵を出し又かの奇計を施して八官軍と戦ひしが後土州の兵今市に邀く大ひまたまた戦ひて互ひに勝敗ありけるが終ひに官軍の勢ひ鋭く賊兵多く敗亡せしかバ仍て大鳥圭介も此地に足を留めがたく残兵数人を引倶して會津へ走りけりと言ふ

是より八幡舟橋の戦ひ続いて上野戦争より奥羽越後へ官軍向ひし所々にて接戦なり其訳は第二編に記すべし

明治太平記初編巻之二終

明治太平記　自初編 追々出板　櫻齋主人編集　鮮齋永濯画圖

報國為後と魂　彩色入 追々出板　戯墨堂主人輯　孟齋芳虎画圖

日吉町
武藏屋真次郎

日本橋通三丁目
延壽堂　丸屋鉄次郎出版